十六、雉子神社

　雉子神社は、室町時代の文明年間（一四六九～八六）の頃には、山神社と呼ばれていたそうです。

　その頃、このお宮に飛んできた、一羽の白い雉子が、死んでしまいました。その夜のことです。一人の村人の夢の中に、鎧・兜に身をかためた勇ましい武人が現れて、「われは、日本武尊なり、われをこの地に祀るならば、国を守り、村人たちの安全を守るであろう。」と、告げると、白い雉子になって、飛び去ってしまったということです。

　村人のこの夢の話は、村中に伝わり、村では、日本武尊をこのお宮の祭神として祀り、お宮の名も「大鳥大明神」と改めました。

　それから百五十年ほど経って、この地に鷹狩りに来た、三代将軍徳川家光公が、一羽の白い雉子を見つけ追いかけると、雉子は、この神社の杜に飛び込んで見えなくなってしまいました。将軍は、鷹狩りの手伝いに来ていた村人に、「この宮の名は、何というのか？」と、たずねると、村人が、「大鳥大明神です。」と答えました。すると将軍は、「今、この宮に、白い雉子が飛び込むのを見た。これからは、この宮を雉子の宮と呼ぶがよかろう。」と、言ったそうです。

　このことがあって、村人たちは、この神社を「雉子の宮」と呼ぶようになりました。明治維新後には、「雉子神社」と改称しましたが、いまでも近在の人々は、親しみをもって「雉子の宮」と呼んでいます。

　また、この宮にちなんで

　　かりにくる　人も名なしの　雉子の宮

　　里遠き野に　宿さだむらん

　という古歌も伝えられています。